

## 明治時代に翻訳された日本語

### 明治時代の翻訳者

明治維新は江戸時代に比べて、次の4点で本質的に異なる社会を誕生させた。

- (1) 首都が京都から東京に移ったこと。
- (2) 士農工商の身分制が崩壊し、四民平等の社会となったこと。
- (3) 中国文化中心から西洋文化中心へと移行したこと。
- (4) 教育が普及し、文字が全国民のものとなったこと。

東京が首都になると、多くの人が日本各地から移住し、東京は江戸生まれ江戸育ちの人と薩長土肥を中心とした各地の移住者とが混在することとなった。その実態を明治10年の朱引内いいかえれば江戸府中の本籍所有者と移住者（寄留者）の戸数で比較すると、次のようになる。

	皇族	士族	平民	合計
本籍	316	14,968	152,961	168,245
寄留	14	20,049	20,014	40,077
総計	330	35,017	172,975	208,322

このうち、華族と士族が識字層であり、漢字と漢語を自由に読み・書くことができた。士族も寄留者が本籍所有者より多いことに注目したい。明治政府の勅任官・奏任官は薩長土肥を中心とする寄留士族で構成されていた。文明開化を反映する新しい日本語の誕生は、翻訳を担当した彼ら識字層に負うところが大きかった。

### 日本語に訳された西洋のこぼ

明治時代は、日本が国家の組織から日常の生活様式まで、積極的に西洋化を推進した時代である。しかし、日本人の識字率が平等になるのは、明治も末のことであった。明治6年創設の小学校に入学したのは、明治6年わずかに28.13%、明治10年に39.88%、明治20年に45.00%にすぎず、明治37年になって男女ともに90%の就学率に達するのである。ここで、文字使用の平等が始まるのである。

明治時代の翻訳は、mountain—山、river—川のように、西洋語の意味と日本語の意味とが1対1に対応するものと、対応しないものがあった。対応しないものというのは、その西洋語の概念が日本語に存在しないということである。そこで日本人は新語を誕生させることになった。その新語の造語法には3通りの方法があった。

- (1) 新造語—日本語に西洋語の概念が存在しないので、日本人が新しく造語したもの。

〔例〕 individual—個人 honey-moon—新婚旅行  
philosophy—哲学 science—科学  
she—彼女 time—時間

- (2) 借用語—日本語に西洋語の概念が存在しないので、中国で活躍した欧米人宣教師が中国語訳した訳語を、漢訳洋書や英華辞典から借用したもの。

〔例〕 adventure—冒険 love—恋愛  
telegram—電報

- (3) 転用語—日本語に西洋語の概念が存在しないので、日本語に存在する類義語に新しい意味を付加して転用したもの。

〔例〕 century—世紀 common sence—常識  
home—家庭 hygiene—衛生  
impression—印象 right—権利

このような新訳語の一語一語の成立過程は飛田良文著『明治生まれの日本語』（淡交社 2002）に詳しい。

### 日本語から中国語へ

1814～15の日清戦争の直後から、清国政府は、留学生を日本に送ってきた。最初は1896(明治29・光緒22)年の13名で、多いときは8000名に及び1937年まで42年間つづいた。そして中国人留学生は日本書を中国語訳し、日本で定着した西洋語の訳語を借用した。これら中国語となった日本語を集めた辞書が、汪榮宝・葉瀾編纂『新爾雅』（1903、上海、明権社版、東京並木活版所印刷）である。日中の語彙交流の研究は、これからの興味ある分野である。

(国立国語研究所名誉所員・

明海大学外国語学部客員教授 飛田良文)